

# 国民同胞

発行所  
社団法人 国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都渋谷区東1-13-1-402  
振替 00170-1-60507  
電話 03-5468-6230  
FAX 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部  
毎月一回10日発行  
購読料 年間2000円

## 混迷の時代に日本人としての生き方を求めて

第四十九回全国学生青年合宿教室開催される

合宿運営委員長 酒村 聡一郎

去る八月五日から九日までの四泊五日、阿蘇外輪山の懐に抱かれた「国立阿蘇青年の家」において、第四十九回全国学生青年合宿教室が開催された。例年を上回る猛暑が続く中、全国津々浦々より百六十一名の学生・社会人が相集ひ、「ともに語らう。世界を、日本を、そして自分を。」を合言葉に、講義とそれを受けての班別討論、古典



輪読、短歌創作及び相互批評さらに慰霊祭等に、参加者全員が真摯に取り組み、また新たな体験を得た五日間であった。さて今回の合宿教室のテ

ーマは、「悠久の歴史と伝統の中に息吹く祖国日本の『国のいのち』に触れ、日本人であることの誇りと喜び、そして国民同胞感を体得する。わが国の戦後思想の病弊を克服し、激動する国際情勢を的確に見極め、混迷する日本の進路を模索する。『しきしまの道』としての和歌創作及び鑑賞、また伝統的な学問方法である輪読により古典を味読する」であった。これらのテーマのうちまづ 二つについては、初日の綿田洋一氏による合宿導入講義から真つ正面に据えて説かれていった。氏は『太平記』を丹念に読みながら、後醍醐天皇の御心を偲びつつ一族の命運を懸けて戦った楠正成について紹介され、そこには現代に生きる我々日本人の心にも通ずる「勝敗も生死も越えて何か尊いものを求める純粋無私な生き方があるのではないか」と

問ひかけられた。

また、二日目の小柳陽太郎先生の古典導入講義においても、『古事記』を朗々と読まれながら、そこに描かれてある悲しくも雄々しい倭建命の御生涯に触れられ、「捨身といふ日本人の尊く美しい生き方が日本の永い歴史の中に民族の血として流れてある。日本人の生き方の本質がここにある」と語られた。さらに、今回で二回目の御登壇となられた中西輝政先生は、「文明史から見た『日本』の回復」と題された御講義の中で、一国で二文明を形成してある日本文明の特質を、約束を守ると云ふやうな人と人との信賴の絆の強さであると指摘され、「日本の国を愛するとは日本人の心の形を愛するといふことであり、国がをかしくなったら日本人の心までをかしくなってしまう」と警鐘を鳴らされたのであった。

次に 三日目の小田村四郎先生の御講義「憲法改正論議に欠けてあるもの」において詳らかに説き明かされた。即ち、戦後思想の凝縮とも云ふべき現憲法について、占領軍の意図するままに軍事力で強要されたその制定過程の実態、国情にそぐはない翻訳調の条文、またそこから派生してくる様々な問題点を指摘され、現代日本の病巣はかかる憲法に大

きく起因してゐるのであり、日本再建の道は大日本帝国憲法と教育勅語に立ち返つて考へる道以外にない、と力説された。

今回の合宿では テーマに関し、毎朝「朝の集ひ」の折に、宝辺矢太郎氏から必携書「短歌のすすめ」の中の歌を一首紹介して貰ひ、清々しく一日のスタートを切ることができた。またそれは、四日目の小柳左門先生による「君民一和の伝統」の御講義につながるものであった。先生は、鎌倉時代から今上陛下に至る十五代の歴代天皇の御製を紹介され、御歌の中に込められた国民の上を思はれる御心を偲んでゆかれたが、天皇と国民との間に絶ゆることなく受け継がれてゐる「君民一和の伝統」が日本の国柄そのものであることに思ひを致すとき、日本に生れた幸をしみじみと思つた次第である。

合宿閉幕後、参加学生の一人が「今の日本はどこかをかしい、何か間違つてゐる、このままでいいのだからうかつと思つてゐた。この合宿に来て、今の日本に欠けてゐるところが少し分つたやうな気がする。自分なりに行動に移していきたい」と語ってくれた。運営に携はつた者としてこれに過ぐる喜びはない言葉であった。

(福岡県立香住丘高校教諭)